

II 感状山城跡の調査結果と保護対策

調査者（鳥越 茂、宮田和男、安田邦男）

1 要 旨

昭和 60 年感状山発掘調査時に比べ、遺跡の埋まっている本丸の地面が削られ、倉庫跡から南曲輪に至る登山道が崩れてきたので、現状を調べ、対策を検討した。本丸のある尾根平坦部を守るためにはアセビなどシカの食害にあわない植物を育てること。そのため、灌木の刈り払いを 2~3 年止めて、萌芽枝を整理して 2~3 本育て、太い茎と根系により土壌の流亡を防ぐこと。倉庫跡から南曲輪に至る登山道は角ばった大きい岩石が多いので、深根性の樹木であるコナラの種子を撒いて育てる。10 年ほどすると直径が約 8 cm になるので、伐って萌芽更新する。これにより太い根系が維持され岩石の崩壊防止を図れる。

また、山麓にある羅漢像に至る山道には、直径約 30 cm のモミが 47 本並んでおり、県内では数少ないモミの並木を形成している。貴重な樹木群落として保存を考えていきたい。

2 はじめに

感状山城は相生市矢野町瓜生と森にまたがる標高 301m の感状山の尾根に築かれている。規模が雄大で眺望がよく、人の手による破壊などもなく、石垣や建物跡・礎石・井戸跡などの遺構が比較的よく残されている点で、播磨地方の代表的な中世山城の遺構である。発掘調査が昭和 60 年度から 3 カ年をかけて実施され、平成 8 年には国指定史跡となった。しかし、城跡調査時に木が伐採され、土の流亡が顕著となってきたので現状を調査し、その改善方法を検討した。

3 現状調査

(1) 調査日

平成 26 年 7 月 7 日、7 月 18 日

(2) 調査方法

相生市矢野町瓜生にある感状山の登山道を調査者 3 名で周囲の植生や登山時間、特筆すべき見どころや課題などを検討しながら登った。城跡は土の流亡の状況を目視により調べ、城跡の周りの雑木刈込場所はナビを使って場所と面積を調べた（図-1）。また、感状山の山麓にあるモミ並木は登録樹とする価値あるものとして、樹高の計れるものは測高器を用い、胸高直径は直径巻尺で毎木調査をし、樹木位置はナビ（ガーミン）を使って調べた。

(3) 結果

感状山の登り口から感状山山頂までは約 650mあり、半分以上は階段状の砂利を敷いた登山道になっている（写真-1）。そこから上は岩の多い地形を利用した道が尾根まで続いている。約 400m登ると感状山で最も眺望がよく、晴れた日には瀬戸内海まで見渡せる物見岩に着く（写真-2）。尾根を少し進むと幹が 4 本に分かれた大きなヤマモモ（幹周 220, 230, 260、154 cm、樹高 13.3m）があり、見どころの一つといえる。その先の広場には倉庫跡の標識が立っており、続いて伐採により荒れた登山道に出る（写真-4）。右側の斜面に樹木は見られず、昭和 60 年頃発掘調査時の写真（写真-3）と比較すると、昔はかなり太い木があったようで抜根がいくつも見られる。現在、樹木は全く見あたらず角のある石が散乱している。

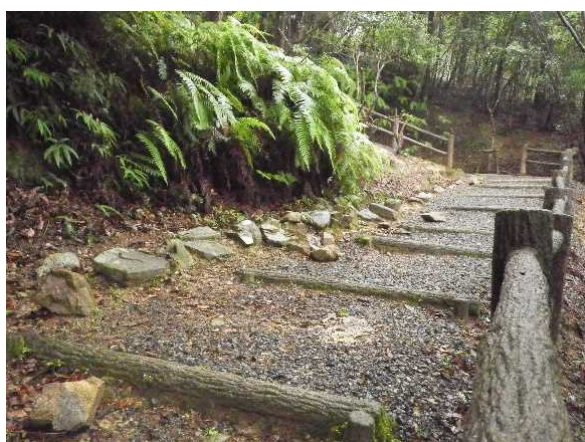


写真-1 登山道



写真-2 物見岩



写真-3 昭和 60 年頃の斜面



写真-4 平成 26 年現在

そこを過ぎる南曲輪から北曲輪と続き、本丸に到着する。法面には岩石が露出しているが、石垣が崩れたものか天然の石が散乱しているのか判然としないところも随所に見られる。本丸の場所は尾根部を平坦にしたところで、地面は地山が露出し、草も木も落ち葉も見渡らない。地元の人が月に 2 回程度登って周辺の掃き掃除をしているとのことである。雨の日



写真-5 地面に水路が出来ている

であったので、水が地面を下り、法面を流れる様子がよくわかった。地面の水が集まり水路が出来て砂と一緒に法面を流れている。(写真-5)。昭和 60 年、山頂に基準点を埋めた写真があるが、地面と同じ高さにコンクリートを打ってある(写真-6)。ところが現在ではコンクリートの下面が見るほどまで露出しており、流亡対策の必要を感じる(写真-7)。



写真-6 昭和 60 年の基準点



写真-7 平成 26 年の基準点



写真-8 平成 21 年の台風により崩れた石垣



写真-9 高さ約 20 cm に刈り取られた灌木

平成 21 年の台風により崩れた石垣も見られ、根系が乏しくなることにより地面の緊縛力が弱くなっていることがうかがえる(写真-8)。法面は刈り払い機により、ほぼ 20 cmに刈り揃えられており、その面積は約 0.3ha あり、根系が乏しくなっている(写真-9)。しかし、根系の露出しているところで根が砂を止めているところも見られ、根系が砂の流亡防止の役割を果たしていることが分かる。法面で見られた主な植物はアセビ、リョウブ、コシダ、サルトリイバラなど、乾燥に強い植物であった。生育のいいのはアセビでシカの食害にあわないためと思われた。

4 対策

植物で城跡を守るには頂上付近の表土の流亡対策を考える必要がある。根系による砂の流亡を防ぐには中木と

言われるアセビなどの樹木を増やすことが考えられる。アセビは鹿が食べないし、春には白いきれいな花を咲かせるので、現在低い位置で行われている刈り払いを 2~3 年やめて樹高約 1mにし、1 株から出ている萌芽を 2~3 本残して刈き取り、太い茎とたくましい根系になるまで待つことを提案する(写真-10)。

倉庫跡から南曲輪群までの登山道は荒廃しており、岩が斜面の途中で止まったり、下まで落ちたりしている。昭和 60 年頃の写真ではそれほどの荒廃は見られないことから、遺跡調査の際に周辺の樹木が皆伐されたことの影響と思われる。土木工事をしないで保存する方法として樹木の根系による斜面の維持が考えられる。樹種としては深くまで根を伸ばし高木となるコナラが適している。コナラも大きくなりすぎると倒伏により根返りする恐れがあるので、直径が約 8 cmになると樹高 1mで伐採し、そこから新しい芽を出させる萌芽更新により根系を維持する方法が適している。コナラは地域の小学生と一緒に感状山のどんぐりを拾い撒いて育てる、周辺は柵を作りシカの食害を防ぐ必要がある。時間がかかるかもしれないが、地域の人と一体になって感状山を保護する意識が高まると思われる(写真-11)。

地元の人の話によると、ここに多くの人に来ることは駐車場の収容能力、地元



写真-10 アセビの保育による表土の流亡防止



写真-11 コナラの育成による法面の崩壊防止

い人がいないことから無理と判断しているようだ。このことから、あまり経費をかけずに城跡を守る方法を中心に検討した。一方、感状山のふもとには谷沿いに平均直径約 30 cm のモミが 47 本並木を形成しており、最大のものは直径 135 cm、樹高 33m であった。このようなモミの大木の集団は県内では数少なく、貴重な樹木群落というべきで、登録して残す必要を感じた（写真-12、-13）。その他にも県内の貴重種であるシリブカガシの群落、マヤランなど、豊かな植生が見られる場所でもあり、各方面での活用が期待される場所であった。

5 おわりに

今回の調査において“感状山城跡—発掘調査報告—”を相生市教育委員会より譲っていただいた。おかげで、今から約 30 年前の感状山の環境と比較することができ、また、写真も使わせていただいた。この稿を借りてお礼申し上げる。羅漢の里の入り口にある茶店では地元の方の率直な意見もうかがうことができた。そのことを勘案しながら実施可能な提案をしてきたつもりであり、今後とも地元の人と共に活用できる感状山城跡の保存を考えていきたい。

